

「浙江大学スプリングスクール参加報告書」

京都大学農学部・資源生物科学科（黒瀬裕貴）

今回のプログラムに参加した動機は、中国語の学習だけでなく、世界でますます存在感を増す中国の社会が、その中で生きる人々が、どのように日々を営み、激動の中を進んでいるのかを、この目で見、耳で聞き、肌で感じることにあった。日本の中では、政府や人々についての良くない話が無責任に飛び交うばかりで、確かな知が得たいと思ったのだ。これについては、当初の見込みからすると満足のゆく洞察が得られた。幾重にも連なる巨大なビル群や、観光地として洗練された杭州の街は、期待を大きく上回るものであったが、行き交う人々の振る舞いは、私の持っていた現実主義的な彼らのイメージと一致した。彼らの歩みは忙しく、誰もが我先にと道を急いでいた。自転車があればさっそうと風を切り、バスが来ればすかさず乗り、障害物はたと人でも警笛を鳴らして容赦なく退ける。目まぐるしく変化してゆく周囲の環境に少しも物怖じせず、むしろそれを徹底的に活用する強かさが彼らを満たしていた。日本の人々は実行に向かう気迫がないといわれる。行う前に知を得ようとし、いつも行為が知の後に来る。日本の人々をこのように考えるならば、私が彼の国で見た人々は、行いを第一とする人種なのだろう。これは全く私の偏見かもしれないが、日本人の慎重さを窮屈に考えている私にとって、それは我々が学ぶべきことのように思われる。尋常でない発展の速度も、そのようなところに理由があるのかもしれない。

さて、語学の話に移るが、現地での中国語学習は以下の三点で特徴的だった。第一に、現地での中国語、つまり母語とする人々や先生の会話は、日本の大学の机の上で学んだそれよりもはるかに早く、瞬発的な応答が大変困難だった。上に述べた彼らの気質が関係しているのだろう。第二に、学習を補助する言語としては、主に英語が使われており、授業を受けるクラスメイトとの会話にも英語を用いる必要があったことである。コミュニケーションの道具としての英語の重要性を改めて思い知り、英語学習への動機を高めることにもなった。第三に、現地での観光や生活、授業での日常的な会話を通じて、暮らしに身近な語彙が多く身についた。英語についてもいえることだが、これらの日常語は読み書き中心の机の上の学習では穴になりがちなので、良い助けとなったと思う。

以上、二週間という短い時間ではあったが、体験としても、語学としても、実りのある日々であった。